

東京大学理学部

広報

— 5 卷 3 号 —

昭和 48 年 5 月 10 日発行

目 次

アイヌの世界	埴原和郎……(2)
鉱物学第二講座の増設について “For Sale”	定永 両一……(3)
	池上 明……(4)
私の読んだ本(1)	山口嘉夫……(5)
鮫島先生を偲んで	田丸 謙二……(6)
《学部消息》	(7~10)



トチノキ *Aesculus Turbinata*

構内にはトチノキが3種ある。三四郎池周辺に多い本当のトチノキ、山上会議所や浜尾総長像近くにベニバナトチノキ、農学部正門近くのマロニエ。いずれも4月下旬から咲きはじめて5月になるとよく目立つ。ところが化学館前のトチノキはよくマロニエと誤称され、また一方ベニバナトチノキもマロニエと混同される。比べてみると葉の形だけでも識別でき、へりに規則的な波形の鋸歯をもつトチノキ、不揃いのとがった鋸歯に裂け、葉全体にしわの多いベニバナトチノキ、不揃いでもしわのないマロニエといった違いがある。

(大橋広好: 植物)

アイヌ起源論

埴原和郎 (人類)

北海道にすむアイヌといえば、こいひげをたくわえ、アツシ (アイヌの民族衣裳) を着てクマ祭りをする、一種の“異民族”という感をもつ人が多いかもしれない。

たしかに、100年ほど以前のアイヌは、本州にすむ日本人 (アイヌ語でいう和人^{シヤモ}) とはかなりちがった風俗、習慣をもち、また顔つきや体つきも独特であった。しかし現在、アイヌは和人と高度に混血し、生活もふつうの日本人とかわることはない。観光絵はがきに写されているアイヌ風俗は、単なるヤラセ (演出) にすぎないのである。

このように、こんにちのアイヌは人種学的にみても、すでにその特異性を失ないつつある。しかしその本来の特徴には、近隣の集団とは明らかにことなる点があり、古くから人種の起源について多くの研究がなされてきた。

今までに提出された主な説を紹介すると、第1はコーカソイド説といえるもので、アイヌは白人系の人種という考えかたである。第2はオーストラロイド説で、アイヌはオーストラリア原住民と同系であるとし、第3は黄色人種の系統に属するとするモンゴロイド説である。

これらはいずれも、主として形態学的研究によるものであるが、問題は、ある特殊な形質、とくに近隣の集団とはことなるような特徴に注目している点にある。たとえばコーカソイド説では、アイヌの多毛性、眉間の隆起、頭形などが白人に似ているということを根拠としているが、同じような特徴は、程度こそちがうものの、オーストラリア原住民にもみられるし、また少なくともその一部は、日本の縄文時代人にもみられる。

このように、従来の形態学的研究には、研究者の主観に左右される部分が多く、もう一度研究をやりなおす必要があることが痛感される。つまり、主観的な判断によって目立つ形質ばかりを問題にすることは危険で、むしろ一般的な形質をなるべく多く比較することが重要である。そしてその方法としては、最近多く使われるようになってきた多変量解析法が有力な武器となるように思われる。

このような観点から、国立科学博物館の山口敏博士は、北海道で出土した古代人骨の研究を行ない、またこ

れとは別に、私はすでに報告されている人骨のデータを使って計算を行なった。これらの人骨の統計学的解析によれば、アイヌは本州の縄文時代人によく似ており、同時にシベリアの青銅器時代人にも近い。また現代人との比較では、和人やエスキモーなどと比較的よく似ており、白人やオーストラリア原住民とは大きくことなることがわかった。

一方、私自身の歯の形態学的研究の結果も同様であって、アイヌの歯の特徴は、混血の影響を除いて考えても和人にもっとも近く、ついでアメリカンディアンやエスキモーなどの蒙古系人種によく似ている。さらに、人類学教室の尾本恵市助教授と杏林大学の三沢章吾助教授らは血液型、血清タンパク、血球酵素などの変異をしらべたが、この結果もアイヌが白人系やオーストラロイド系であるという説に対して否定的で、むしろモンゴロイドとの近縁性を示している。

このように、最近の研究はいずれもアイヌが蒙古系人種に属することを強く示唆しているが、それでは、どうして彼らが近隣の集団とはちがった特徴をもっているかという疑問が生ずる。この点についてはまだ十分な研究が進んでいないが、最近の先史学や地質学の知見を参考にすると、おそらくアイヌは、古代アジア人の形質を多く保存している集団と考えてよいように思われる。言いかえれば、彼らは人類のより一般的な形質を保存しているために、周囲の特殊化した集団とはちがってみえるのではないかと考えられるのである。

同様な例は他にも求められるが、一般に古代型といわれる集団は大陸の周辺部にみることができ、その原因としては文化の後進性、集団のサイズが小さいこと、閉鎖的な環境などが考えられる。したがって今後は、アイヌの形質の分析をさらに進めること以外に、その環境とのかかわり合いについて、先史学、民族学、地質学などとの interdisciplinary な研究を行なうことが必要である。

アイヌという集団は、世界的にみればアジアの一角の一つの小さな存在にすぎない。しかしその成立の歴史は、人類進化の縮図として、私どもに大きな問題を投げかけているのである。

鉱物学第二講座の増設について

定 永 両 一 (鉱物)

鉱物学教室は明治 38 年 (1905 年) に地質学教室より分離独立した。その後 68 年の長年月日に亘り、1 教室 1 講座のままで存続したが、今年やっと 1 講座の増設が認められることになった。もっとも、68 年と一口には言っても、前半の 30 余年は 1 講座のままで大した不便はなかったかと思う (これは今になってのわれわれの勝手な想像に過ぎないが)。しかし、学問の進歩の当然の結果として、本教室では昭和 14 年から講座増設の申請を始めたと聞いているが、その後しばらくこれが如何に取り扱われたかを私は全く知らない。昭和 20 年代も半ば以後になると、当時の教室主任伊藤貞市先生の御都合が悪かった折などに、若造の私が先生の代理として時には教室主任会議などでわれわれの立場を主張しなければならぬことになり、かなり詳しい事情を知るに至った。この間に印象に残る出来事も多いが、以下には私の数ある失敗の一つを告白させて頂くことにする。

今から 10 数年前のことであるが、鉱物学第二講座が連続 2 回理学部の第 1 位に推されていたことがあった。第 2 年目にはもう一步というところでうまくゆかず、本学本部との折衝では第 3 年目には通るようにするとのことであったと私は聞いていた。しかし当時伊藤先生は不幸にして病氣御療養中であつたので、“この事情を説明してもう一年是非第 1 位にしてくれと言え”との御敕命を受けて私が理学会会計委員会に出席してお願いする段になった。ところが、馬鹿と言おうか、若気の至りと言おうか、“是非第 1 位を”と思いつめたばかりに、一言多かった; “それ以上はもうご迷惑はお掛け致しません”と付け加えてしまったのである。かくして第 1 位第 3 年目を迎えたが、結果は意外やアウトとなつてしまったのである。後で当時の理学部長故服部静夫先生に伺えば、その年獣医法の改正が行なわれて、農学部獣医学科にどうしても 1 講座増設しないことには卒業生が馬牛豚の類の脈を見る資格が得られぬとて、その方に取り残ってしまったとのことであつた。この年の理学会会計委員会は私には全くバツの悪いものになつてしまった。委員長の弥永昌吉先生を始め諸先生方にはできることならもう一年助けてやりたいと思つておられることがありありと窺えるにもかかわらず、前年の私の勇ましい発言が邪魔になつてどうしようもない。ついに最後尾に落ちて、再び

陽の目を見るのにさらに 10 年を要したという次第である。

この大失敗にこりて、最近では専ら沈黙を旨とし、前回の倍の年数を第 1 位に居すわらせて頂き、皆様方に今度こそ本当にご迷惑をお掛けしてしまつた。誠に申訳なく存ずるとともに、非力なわれわれでも何とかここまで漕ぎつけ得られたのは、一に皆様方の御理解御同情の賜物であり、心から感謝申し上げている。実に、もし今回講座が増えなかったものならば、われわれは学問の進歩の波もさることながら、ますます複雑化の道をたどる諸種の手続きに押し流されて、近い将来に確実に難破していたことであろう。

さて今年増設される講座は X 線結晶学を専攻するものである。現代の鉱物学の大きな柱と称すべきものは、(1) X 線結晶学、(2) 合成鉱物学、(3) 記載鉱物学で代表されると言い得よう。これまでは、たったの 1 講座でとにかく教室の面目を保つためには、これらすべてに手を拡げるわけにもゆかず、(1) を 90%、(2) を細々と 10% 位い続け、(3) に至つては、わが国の鉱物学の創始者であつた本学の前身の帝国大学の和田維四郎教授以来の伝統として、元来当鉱物学教室には日本産鉱物の記載の任務が引継がれ、先代の伊藤先生はこの方面の仕事にも大きな成果をあげられたにもかかわらず、最近に至つては地質学教室の渡辺武男先生、教養学部湊秀雄教授、そして神田須田町の鳥料理屋“ぼたん”の経営者であり同時にわが国の記載鉱物学の第一人者である桜井欽一博士らの御援助にすぎり切りといった状態であつた。それゆえ、今後は従来からあつた鉱物学講座において上記の (2) と (3) とを大いに振興し、またここ 10 数年来当教室が世界にさきがけて着手している高温における結晶構造の変化の研究では 2 講座協力して地下深部における鉱物の状態の解明に至らんとするこの研究をさらに発展させようと志しているが、これらは単なる夢であつてはならない。しかしその上 crystallographic space groupoid (Brandt の定義による groupoid) からさらに topological crystallography の研究もと、段々と欲を出し始め、近く“第三講座を何卒”てなことを申し出ないとも限らぬとなると、これは隴を得てまた蜀を望むというものであろうか?

“For Sale”

池 上 明 (物理)

ケンブリッジから帰って少し落ちついたと思ったら、この広報の編集者、小堀先生から何か気軽な印象記でも書けとのお話し。一年間 100 万人も国外に出かけ、外国情報があふれているとき、今さら拙文を書くこともなかりと、手前勝手を並べてみたが、貴重な時間をわずらわしい仕事にさいておられる先生と、とにかく一年間、解放された者としては勝負にならない。とうとううめ草を書くはめになった。

イギリスから帰る 10 日程前のことである。現地で必要に応じて買い求めた幼児用の椅子とか電熱器など数点、処分し固り、後から来る外国人研究者にでもと思って同僚に相談したら、研究所の掲示板の“For Sale”に出せという。「Suzuki 50...good condition」というメモが長い間ぶら下っていて何なく気になったのを思い出し、職員全部でも 200 人余りでは効果はなかりと思いつながら、相談した手前もあって、ノートの切端に、品名と値段を書き、掲示板のクリップに前の人の上に重ねてとめた。それから 4~5 日、一点を残して全部売れ、生れて始めて商売の面白さを知った次第である。売れ足は、安いものが確実に早かった。値段をつけるときは、よごれぐわいと感じて決めたのであるが、後から考えると、買ったときの 3~7 割の範囲に適当にちらばっていて、うまい実験をしたことになる。買う方は、品物と市価を十分心得ている様子で、最初に聞くのは、「あの椅子は売れたか？」であり、満足に機能していれば、よごれなど気にしない。

新品でもネクタイ一本分ぐらいの電熱器を買ったのは、研究所の副所長クラスの人である。

ケンブリッジの街に、古着、古道具を只で引取り、その売上げを全部赤十字に寄付する店がある。店員も全部社会奉仕の人である。そこにプラスチックの石けん入れが何ペンスかで並べてあったという。

10 日程前か、テレビで「イギリス人と骨董品」というのをやっていたが、何も骨董品ばかりではない。古いものを愛し、その価値を徹底的に利用するのが彼らである。それもあながち「ケチ」だからではすまされないと

ころがある。

ある 5 月の日曜日、航空ショーを見に行こうとのさそいで二時間程ドライブした。そこにはライト兄弟頃から、V 2 号まで各種さまざまな飛行機が陳列してある。驚いたことに、そのほとんどが今でも飛べるように整備されているという。その日風が強かったので、予定された 1910 年代初期の飛行機の実演はとりやめになったが、1920 年頃の二板羽根が宙返りするとは予想もしなかった。

スコットランドの西岸に Call という島がある。この島の小城の廃墟に永住しようとする一家に会った。丁度一週間前にこちらに来たというので、電気もない。昼間でも真暗でところどころくずれた階段を手さぐりで上ると、3 階に夫婦の寝室があった。どす黒い石の壁がそのままである。昔王様が寝たところだという。そういえば、この夫婦、その王様の子孫だという。小学生にもならない二人の子供をかかえた若い奥さんは、こちらでの生活に何の不安も感じないらしい。夢は、ここを、農業指導のためアフリカに渡る青年の訓練所にする事だという。あらためて外を見まわしたが、畑など一つもない、城の周囲数キロには民家は一軒もない荒涼としたところだ。島の人口は 120 人で、自然の木は一本も生えてないという。

ここに典型的なイギリス人を見た気がした。古いものを愛するイギリス人氣質が、イギリス経済の沈滞をもたらすという説があるが、少なくとも学問の世界では必ずしもそうではなさそうだ。筆者の関連する分子生物や生理学の分野では、既存の方法を徹底的に追究した彼等のやり方が、最も新しい発展の原動力となっている。

使いすてが公害をよぶ今、“For Sale”の掲示が学内に出ないものであろうかと研究室の学生に話したら「大学当局が目につくところに専用の掲示を立てるべきである」という答が返って来た。イギリスでは、ベニヤ板に 20 cm×20 cm のスペースがあれば十分であったが、こちらでは安田講堂全体を中古品のネオンで飾ってみても引きとり手があるかどうか？

ジャック・ブズー著 平山 卓 訳

「わたしのニッポン発見」(三省堂, 1972)

山 口 嘉 夫 (物理)

気にいつて息もつかず読んだ本、買ったけれどつまらなくてカッカした本、であれば一気に胸のすく書評ができよう。しかし近頃真底面白かったという本にお目にかからない。今日は頼まれてよんどころなく書評をする。相手はジャック・ブズー著わすところの「わたしのニッポン発見」。行き届かぬ点は迄容赦。

日本人は依然として、他人(外国人)がわれわれ日本ないし日本人をどう見るかが気になる人種らしい。戦前のあまりに多い例はさておき、マクルーハンに喝采し、イザヤ・ベンダサンにうなづき、第三の大国をもちあげる……。上等舶来は江戸期いや遣隋使以来の抜きがたくしみこんでいるものなのか。そんな先入観をもってこの本に接したのだが、うれしいことに予期に反し、公平ないい文明批判の書であった。この本をすすめられた小堀先生の目はたしかであった。

さて、ベンダサンの身元は知らぬが、どことなく日本人くさい隙間風が吹く。それに反しブズーは日本の民家を研究する正銘のフランス人地理学者であって、在日10年の経験をもつ。わが東大理学部客員研究員でもあった。その彼の見た日本にかんする気楽なエッセイ集がこの本である。

いい点も悪い点のみみこんだ上で、素直に日本を見ようとする原著者の態度にすっかり好感をもった。卒直にいった機会があれば、塩豆をかじりながら、ゆっくり話したくなる人物と見受けた。外国へゆく人にぜひこの本を読んでほしい。そしてフランス→日本、日本→君のゆくであろう外国という反転を実行して他山の石としてもらいたい。外国へゆく人がこの著者のような目で見ること

ができれば、本職の専門上に得る所がなくても立派な外国旅行をしたといえるであろう。

内容についての紹介は一切しない。読んでのお楽しみということにしたい。ただしこの書評らしき一文は、訳本(上々の訳である)を読んで物していることを証明するために、二三の「蛇足」をつけ加える:

著者が科学者だからであろうか、やたらと論理的フランス人をふりまわす。ドイツ人が彼ら流にかたくなな論理に肩肘はるのとよくにいておかしかった:それはフランス人の重要な一面ではあろうが、同じ論理的質問・論理的設定にヨーロッパの農牧民がどれほど論理的に答えうるかを思っただことだ。さらに日本の科学者も少しニュアンスは違うが同じ位理屈っぽかろう。まあ、お互い様ということに願いたい。

第二に、原著者はベルサイユかどこかの庭園をヨーロッパの模範と信じているようだが、これは中華思想フランス版であろう。フランスの宮殿に伴う庭園はイタリア・ルネッサンスの栄光を移植して完成したものなのに。

第三に、フランスは古く、日本は若いという。著者の頭の中でフランスの歴史にギリシヤ・ローマが解析接読されているのではないか。ローマ色からフランスが解放されて以来のフランスが日本に比べて本当に古かったかな。フランス人がローランの歌を歌ったときには、日本は散文文学の時代にあった。さらに極言すれば、日本には世界最古の土器ありと誇ろうか。

それはさておき、気楽になかなか楽しめる本である。一読一考をすすめたい。

著 書 紹 介

在外研究の記録としてユニークな本が出たので一寸御紹介しておく。坂口 豊「ウィーンと東アルプス」(古今書院, 1973年3月)で、ウィーン大学地理学教室を根城に“ウィーン好日”(第一章)を語り、“東アルプスところどころ”(第二章)では、著者の専門の自然地理学の立場からアルプスの氷河の問題などを学説史もふまえて堂々と論じている。ウィーンの町や森などの航空写真も興味深く、いかにも理学部の先生の著書にふさわしい。これからウィーンに遊ぶ人にも、かつてシュタート・オペールを観賞した人にも一読をおすすめしたい。

小堀 巖(地理)

鮫島先生を偲んで



本学名誉教授、学士院会員の鮫島実三郎先生が去る4月30日に総胆管結石症のため逝くられました。享年82才、先生は大正3年に本学化学科を御卒業になり、大正12年から昭和26年まで、28年もの間化学教室の教授として、教育に、研究に尽されました。先生は「膠質学」が御専門で、固体による気体の収着、摩擦現象、コロイド系の諸物性……たとえば粘性、電気伝導度、滲透圧、気体透過性燐光など、さらには油滑性、起泡性、曳糸性など多岐にわたって多くのお仕事を残され、昭和27年には日本学士院賞を受けておられます。日本化学会会長を2度も努められ、殊にその欧文誌は先生の御尽力により創められ育ったものです。

先生は御在任中終戦前後を通じて10年以上も化学教室の主任をされ、常に誠実で公平な御人柄でした。志操高く、殊に名利に恬淡で、その純潔な御性格は皆から敬慕されておりました。自然を愛され、殊に植物については御造詣が深く広いお庭一杯、丹精こめて世話をしておられました。御自宅でも極く内輪にとりおこなわれた御葬式の際にもアカシアやつつじが咲き乱れ、新緑が見事に5月の陽光に映えて印象的でした。先生の御冥福を心から祈り上げます。

田丸謙二（化学）

4月理学部会合日誌

- | | | |
|--------|-------------|-------------------|
| 9日(月) | 14:00~16:30 | 理学系研究科委員会 |
| 10日(火) | 10:30~12:30 | 会計委員会と総計画委員会の合同会議 |
| 11日(水) | 10:00~11:00 | 学部進学生へのガイダンス |
| | 16:00~17:00 | 人事委員会 |
| 13日(金) | 11:00~11:00 | 大学院進(入)学生へのガイダンス |
| 17日(火) | 10:00~12:00 | 教務委員会 |
| 18日(水) | 13:15~18:00 | 教授会 |
| 23日(月) | 12:00~14:15 | 学部長と理職の定例交渉 |

部長の新任

4月1日付を以って植村泰忠教授は部長に新任された。なお部長新任にあたって次の挨拶が掲示された。

理学部の皆さんに

この度、本日から2年間の任期で、私が理学部長を務めることになりました。

理学部の研究と教育がますます活発となるように、またその職場が一層働きやすいものとなるように、地道な努力を重ねてゆきたいと思います。しかし、何分非力のこととて、皆さんの意に十分そいかねることも多かろうかとおそれています。就任にあたり、温かい理解と鞭撻とを希う次第です。

4月1日

植村泰忠

教授会メモ

4月18日(水) 定例教授会

理学部四号館会議室

教授会講演 植原和郎教授(人類学教室)

「アイヌ起源論」(内容は2頁に掲載)

議事1. 学部長就任の挨拶

2. 教授会新メンバーの紹介（8頁参照）
3. 前回議事録の承認
4. 人事異動海外出張等の報告
5. 学部長から理学部新委員の提案があり，原案通り承認された。
6. 24名の研究生について在学期間の延長が認められた。
7. 35名の研究生の入学が認められた。
8. 教務委員会報告
 - i) 理学部便覧について
 - ii) カリキュラムについて学生自治会との接触の件
 - iii) 他学部時間割を学生が容易に知り得るよう便宜をはかる件
9. 臨時カリキュラム委員会報告
 - i) 進学後に取得する一般教育科目については，単位の取得もれがないよう十分に注意して欲しい。
 - ii) 理学部教官の全学セミナーへの出講数を増して欲しい
 - iii) 進学のためのガイダンスとして新たに学部ガイダンス（仮称）を設ける件
10. 人事委員会報告

定員削限等について
11. 寄付の申し込みが3件あり受入れが承認された。
12. 会計・総合計画委員会合同会議報告

概算要求各項目について，報告，説明が行なれた。
13. ラジオアイソトープ取り扱いについて

なお全学 RI 委員は齋藤教授が辞任され，浜口教授が新たに就任された。
14. 理学部共用オンライン計算機について
15. 理学部5号館の新築の件

新 委 員 表

敬称略		48. 4. 18
評 議 員	植村，大木，下郡山	
幹 事	大木，下郡山，宮沢，田丸，浅田	
人 事 委 員	田村，吉田，木原，寺山，藤原	
会 計 委 員	田丸，古谷，福島，小柴，岩堀，吉川	
教 務 委 員	飯田，高橋(武)，吉川，代谷，	

総 合 計 画 委 員	堀，岩堀，霜田 植村，大木，下郡山，山口，野田，寺山，小松，浅田，木村(敏)，久保 (建築特別) 植村，古谷，黒田 佐藤(正) 浅田，露木，永田(豊)，藤井(隆)
学 生 委 員 (全学)	駒嶺
学 生 委 員 (理)	竹内(均)
学 寮 委 員	朽津
教 職 課 程 委 員	藤田
教 養 連 絡 委 員	森田
図 書 行 政 委 員	小堀，清水
広 報 委 員 (全学)	齋藤(信)
広 報 委 員 (理)	藤井(隆)
外 国 人 学 生 委 員	堀田
学 生 相 談 所 委 員	渡辺(直)
学 生 保 健 委 員	藤井(隆)
奨 学 委 員	代谷
英 文 カ レ ン ダ ー 委 員	霜田
ガ イ ダ ン ス 委 員	小柴
臨 カ リ 委 員	藤原
山 上 会 議 所 委 員	荒田
公 害 防 止 委 員	今井
ア ル バ イ ト 委 員	
東 大 百 年 史 委 員	
協 議 員	植村，江上，小柴
院，学 生 委 員 (全学)	古屋
院，奨 学 委 員	渡辺(直)

教 室 主 任 (48. 4. 1)

数 学	木村(俊)教授
物 理	西島 "
天 文	末元 "
地 球 物 理	竹内(均) "
化 学	稲本 "
生 物 化 学	野田 "
動 物	寺山 "
植 物	古谷 "
人 類	渡辺 "
地 質	花井 "
鉱 物	定永 "
地 理	佐藤(久) "

施設 の 長

臨海	小林 教授
植 物 園	門司 "
地球物理研究施設	永田(武) "
情報科学研究施設	高橋(秀) "

理学系研究科専門課程主任 (48. 4. 1)

数 学	古屋 教授
物 理	小柴 "
天 文	末元 "
地 球 物 理	竹内 "
化 学	佐々木 "
生 物 化 学	野田 "
動 物	江上 "
植 物	飯野 "
人 類	渡辺(直) "
地 質	花井 "
鉱 物	湊 "
地 理	吉川 "
相 関 理 化 学	片山 "
科学史科学基礎論	渡辺(正) "

新任者の自己紹介

齋藤 太郎 (化学)

経 歴

昭和 13 年 1 月 1 日生 35 才 妻 1, 男児 2
 昭和 36 年 東京大学工学部応用化学科卒業
 昭和 41 年 東京大学大学院工学系研究科修了
 工学博士号取得
 昭和 41 年~昭和 45 年 東京大学工学部工業化学科助手, その間, 昭和 42 年~昭和 44 年, 2 年間文部省在外研究員として英国オックスフォード大学無機化学教室で, 有機金属化合物の合成研究に従事

昭和 45 年 理学部化学教室に配置換
 昭和 48 年 理学部化学教室講師 (無機合成研究室)

専 門

遷移金属錯体ならびに有機金属化合物の合成と反応。特に遷移金属ヒドリド, アルチル, 窒素錯体等に興味を持っています。

趣 味

特になし, テニスは 20 年来やっていますが下手。

上条 文夫 (天文)

私は藤田良雄博士門下で恒星の分光学をやってきました。大学院生のころは先生の観測を手伝うため毎月のように岡山県の山の上にある天文台で暮しました。桃の花が美しく咲きそろう春や松茸狩りのできる秋など岡山の思い出は尽きません。先生は赤い低温度の星が専門でしたので私の興味も自然にそちらに向きました。分光学の他に, 高温の星で使われている恒星の安定性や脈動の理論を低温の赤色巨星にもちこむことや, 恒星の大気中で固体微粒子が生成されるかどうか論ずることなどやりました。現在は物理学教室の装置を使わせていただいて, 数人の大学院生と星間塵に似た微粒子を作る実験をやっています。できた粉の形や構造を調べたり紫外線や赤外線吸収を測るため, 物理学教室の他に鉱物学教室や化学教室の器械も使わせていただいています。理学部の多数の方にお世話になります。どうぞよろしく。

人 事 異 動

(助 手)

教室	官職	氏 名	発令年月日	異動内容
植物	辻	堯	48. 4. 1	助手に採用
地物	助手	木下 肇	48. 5. 1	気象大学校助教に転任

(講師以上)

教室	官職	氏 名	発令年月日	異動内容
鉱物	教授	正田 篤五郎	48. 3. 31	退職

外国人客員研究員報告

教室(所属)	国籍	氏 名	現 職	研究期間
数学	米国	Bernhard Dwaork	プリンストン大学教授	48. 5. 1 ~ 48. 7. 31

編集註記: 文部省発令の関係で異動表は次号にのせます。また, 未着の自己紹介も順次掲載します。

4 月 海 外 渡 航 者

教室	職 名	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
情報	教授	後藤 英一	スウェーデン	4. 4~	スウェーデンストックホルムにおいて